古い友からの贈り物　その３

～我が塾の成瀬のお話～

子どもの権利擁護委員　関谷　道夫



サザンビーチＴシャツを毎年送ってくれる友人のお話をしました。

この友は、他大学の**工学部**を退学し、「**先生になる**」という明確な目的を持って、**心理学科**に入学してきました。年齢も少し上で、幅広い人生経験から、同期と比べると、容貌も発言も、落ち着いた雰囲気がありました。決して穏やかなだけではありません。議論になると、**ソクラテス式問答法**ばりに質問が飛んできて、自らの発想の底浅さや矛盾を思い知らされたことがあります。孤立を恐れず、かつ、それぞれの生き方に敬意を払っていました。

教員生活では、職員会議にまったく出席せず、管理職と組合の両方から攻められていたと笑っていました。真偽はわかりません。同期の誰もが予想したとおり、しばらくして「公教育」からは身を引き、地元茅ケ崎で、多彩な子を集めて、小さな塾を始めました。個性を最大化し、「高み」を目指そうとする彼らしい塾は、今でも続いています。

懇談した時に、「今日は塾がないのか？」と聞くと、子どもたちは、塾のない日でも、勝手に教室に集まって勉強しているのだといいます。ラインで画像を覗(のぞ)くと、先生不在の塾で、多くの塾生が机を囲んで、熱心に勉強をしていました。先輩の塾生が施錠などの管理をやってくれています。



塾のない日でも、自主的に集まって勉強しようとする意欲的な雰囲気、先輩後輩の信頼と結びつき、学ぶ楽しみ、塾を開放する柔軟な姿勢、そこを流れる少しの緊張感と和やかな空気…

「成瀬と呼ばれる女生徒」（今は高校生？）のお話をしましたが、その理由は、独特な個性とともに、塾に入って成績が驚異的に伸びたからだといいます。この塾に入ってきた当初は、本当に底辺に近い成績だったものが、自分が驚くほど上昇し、最近では、トップを争うレベルになったと言います。その理由は、私には想像がつきます。

今年のサザンビーチＴシャツには、小さな通信が添えられていました。
～我が塾の成瀬は、びっくりするほどの躍進で、狙って勉強している英語は学年１位、化学は３位､全科目で順位一桁に常時､名を連ねています｡本人が｢私じゃないみたい！｣と笑っています。周りの人たちは、｢バカだと思っていたのに！｣と嬉しそうに｢もっと、勉強しろよ｣と囃し立てています。本人も含めて、みんな楽しそうです～

元工学部・英会話サークル出身ですから、理系の感覚と得意の語学力を駆使して、新感覚の「理系女子」を目標にさせているようです。本人・家族・仲間の誰もが予想したよりも上を目指しています。いずれ「我が塾の成瀬は、○○大学◇◇部に合格した」という知らせがくることでしょう。『ビリギャル』とは趣の違う快挙です。

成瀬と呼ばれる塾生は、そういわれる特性も持っているのでしょうが、日常の誠実な姿勢が、着実に理解者を増やしているようです。メリットがリスクを凌駕しています。最善の選択は、大手の学習塾ではなく、消えるような小さな塾の**変なおじさんを師として選んだ**ことです。

これまで続けてきた先生生活も、幕引きを考える時が近くなっています。

～４０歳になった小学校卒業生が、｢生前葬｣をやってくれました。｢最後の授業｣というのをやらせられました。大勢の前でしゃべることがほとんどないので、喉をやられました。１か月ほど治りません。｢風邪と共に去りぬ｣なんて親父ギャグ言いながら、咳で苦しんでいます。死ぬどころではありません。元気です。コホン！～

遠くない時期に、先生を辞めるとセンセイする時がやってきそうです。先生は｢先に生まれた人｣という意味もあります。｢我が塾の成瀬｣との別れが、その時なのかもしれません。かすかな余韻を残して、静かに消えていくことにしましょう。

（次回は、｢ぼくの好きな先生｣RC サクセションです。）